

B-9 ヌサ・トゥンガラ列島

210. 小スンダ列島



インドネシアはアジア大陸とオーストラリア大陸を繋ぐ懸け橋であるが、それが最も如実に表しているのがバリ島から東へ東へと鎖のように連なる島々である。地理学上は「小スンダ列島」といわれ、インドネシア語の呼称では「ヌサ・トゥンガラ (Nusa Tenggara=東南の島々) 列島」である。

島々を繋ぐ鎖は二重になっており、ロンボック島、スンバワ島、コモド島、フローレス島と連なる北側は活火山列島である。その外の南側のスンバ島、サブ島、ロティ島、ティモール島は隆起性珊瑚礁の島である。後者は石灰性土壌であるため農地として劣り、前者が有利である。

ヌサ・トゥンガラ列島全体に地形が険しいことである。また乾季と雨季の交互する熱帯サバンナ気候である。雨にムラがあり、年によって雨がすくなくとたちまち飢饉^{ききん}になり死者がでる。要するにインドネシアでは最も貧しい地域である。

アジア大陸から延びたスンダ大陸棚(→016)の切れ目がロンボック海峡(→038)である。バリ島とロンボック島との間のロンボック海峡はウォーレス線(→080)としてアジア大陸とオーストラリア大陸の生物の境界でもある。

ウォーレス線の存在は生物科学者が気付いたものであり、一般人が見てそれほど歴然としているわけではない。しかし列島を東に行くと島が変わる毎にだんだんとオーストラリア色が強くなり、刺のある植物や鸚鵡^{おうわ}が目立ってくる。もっともコモド島の^{とかげ}大蜥蜴のように両大陸の間の謎の動物もある。

人間との係わりあいもジャワ島の《水田と水牛》の風景は東に行くに従い次第に変化して《畑と馬》の風景となる。いくつかの島は東西に長く、その一つの島の中でさえ東西に風土の差が生じる。

ヌサ・トゥンガラ列島は最終的にオランダの植民地に組み入れられたが、東ティモール(→222)だけはポルトガル植民地として別であった。1976年に東ティモールはインドネシアに併合されたが、混乱の結果2002年5月に分離独立した。

白檀^{びやくだん}を取りつくし、奴隷も禁止された後はこれという交易品もなく資源も乏しいこれらの地域は植民地経営のメリットもなくどちらかといえば放置されていた。インドネシアになっても基本的には何も変わらない。

ドンソン様式(→011)の銅鼓^{どうこ}がヌサ・トゥンガラ諸島のスンバワ島、サンゲアン島、ロティ島、アロール島で発見された。最も優れたサンゲアン島出土のものがジャカルタの国立博物館に展示されている。西暦紀元の頃、ヌサ・トゥンガラ諸島が南中国（ベトナム）と交易で結ばれていた証である。当時の交易品は何であったのだろうか。

2 1 1. ヌサ・トゥンガラの民族

ヌサ・トゥンガラ（Nusa Tenggara）という小スンダ列島の民族はインドネシアの多様性という言葉で地で行くようなものである。ヌサ・トゥンガラの人口は6百万人にすぎないが民族の数は非常に多い。大きな島でも四国くらいであるが、その一つ一つの島の中にさらに複数の民族が割拠しており、西からのマレー系と東からのパプア系(→626)と民族の架け橋である。

言葉は50ほどあり、基本的にオーストロネシア語群(→563)である。同じオーストロネシア語群の下位分類でスンバワ島西部まではジャワ・バリ系語の言葉であるが、スンバワ島東部からマルク系になる。ティモール島から東はパプア系語の言葉である。

民族と同様にも宗教も多様である。各島の主要宗教は縞模様であり、ロンボック島はヒンドゥー教とイスラム教、スンバワ島はイスラム教、フロレス島はカトリック、スンバ島はプロテスタントとカトリック、ティモール島は西のインドネシア側がプロテスタント、東ティモールがカトリックである。東ティモールは新しい国としてインドネシアから分離独立した理由は輻輳^{ふくそう}した歴史上の事情であるが、宗教の相違もその要因である。

行政的にはロンボック島とスンバワ島が西ヌサ・トゥンガラ州（NTB）、コモド島以東が東ヌサ・トゥンガラ州（NTT）である。両者の区分けは前者はイスラム教が主、後者は非イスラム教が主であり、宗教、民族の相違が反映されている。

これらの表向きの宗教はインドネシア独立後、特に1965年9月30日事件(→384)後に“宗門改め”で宗旨を明らかにすることを強制されたものであり、実際に全地域に共通しているのは祖先崇拝のアニミズム(→696)が強いことである。また都会や海岸地域など外部からの新移民の多い所ではイスラム教徒が増えてきている。

ヌサ・トゥンガラが文化的にインドネシアの他の地域と異なるところはバリ島の影響下のロンボック島、スンバワ島を除いてヒンドゥー教の影響がないことである。この意味でインド文化伝播以前のインドネシアが保存されているといえる。世界の民族学の専門家がヌサ・トゥンガラを民族学の宝庫としフィールドワークを行っている。

各島に小さな王国は存在したが、ヌサ・トゥンガラ全体が政治的に纏まることはなく、むしろ侵略されてばかりであった。西からはジャワ島やバリ島から、北はスラウェシ島からゴワ王国(→267)、東北からは香料貿易で勢力をえたテルナテ王国(→269)から、とその時々外部勢力の支配下に分断されていた。最終的にヌサ・トゥンガラを統一（東ティモールを除く）したのがオランダ領東インド植民地政庁である。

ヌサ・トゥンガラ島の島と住民の関係を要約すると

- 同じ島の民族よりは向かい合った隣島との関係の方が強い。
- 古い民族は島の内陸部で孤立社会を維持している。
- 海岸部に定着しているのは移住の比較的新しい民族である。
- 都会はインドネシア各地からの移住民で構成されている

212. ロンボック島

バリ島の東にロンボック海峡(→038)を隔ててある「ロンボック (Lombok) 島」は直径 80km の帆立貝状の火山島である。ロンボックの語源は唐辛子らしい。

島の中心に居座るリンジャニ (Rinjani) 山は標高 3726 ㎞と島の大きさに不釣り合いに高く、山体は全島面積 4990k m²の約 1/3 を占める。複式火山で頂上は東西 9km、南北 6.6km にわたるカルデラがあり、中央に新山の火山活動が盛んである。

スガラ・アナク、スガラ・エンドゥのカルデラ湖から川が四方に流出し、とくに南麓斜面に広いスロープの裾野を形成している。豊かな農地になりそうであるが、雨が少ないこと、土質がよくないので、北側の方が水、土に恵まれ人口密度が高い。

活火山であるリンジャニ山はしばしば爆発するが、被害をもたらすような爆発は 1901 年以来収まっている。バリ島から海を隔てて美しい容姿が眺められる。アグン山(→179)より高いにもかかわらずリンジャニ山に対するバリ人の畏敬は今一つである。

バリ王家の存在した西海岸のマタラム(Mataram) が行政の中心であり、西ヌサ・トゥンガラ州 (スンバワ島を含む) の州都である。

人口は 230 万人もあり、火山の持つ扶養力の豊かさに驚かざるをえない。地味は肥えているが、問題は雨である。熱帯サバンナ気候のため米も年一回である。雨が極端に少ないことがあり、1966 年は飢饉で 5 万人が餓死した。人口過剰の島ということでジャワ島、バリ島と同様の移住政策(→724)の移住元の対象の島である。

バリ島の東に連なる最初の島はロンボック島である。ロンボック海峡の深い水深はウォーレス線(→080)という動物界の境界であるが、人間界についても見えない壁となっている。ジャワ人の意識によればバリ島までは同胞の地であるが、その先は塞外の地である。

最近では隣島のバリ島にあやかって観光開発に力が入っている。ササク族はバリ人のように観光ズレしていない上に料金も安いのが魅力である。海浜にリゾート・ホテルが建設されている。インドネシア観光案内書にもロンボック島の記載が多くなった。スノーケルなど海だけを求める観光客の人気を集めている。

ロンボック島の浜辺の美しさはインドネシア一番といわれる。ある浜辺では大手開発業者が自然保護を名目に地元住民の立ち入りを禁じた。ロンボック島の観光開発が中央(ジャカルタ)資本の餌食になっている。

本島の西北側のロンボック海峡にある小島のギリ(Gili) 3 島はロッジ形式の滞在型のホテルである。自然が残されてエコ・ツアーの人气が高い。1 週間程、俗世間から遠ざかると生まれ変わったような

気になると、滞在体験者が言っている。

観光案内書には“桃源郷”のように記載してあるロンボック島でも、2000年年初に、イスラム教徒がキリスト教徒を襲う宗教暴動が発生して観光に影響している。ロンボック島にキリスト教徒がいたらしい。

213. ササク族

ロンボック島原住民のササク (Sasak) 族は15～6世紀にイスラム教が導入された。一方、18世紀後半からバリ島のカランアセム王国(→178)の侵略を受けてその属国になり、バリ人が移住し島の西側はバリ化した。1839年、ロンボック島のバリ人王家は独立シマタラム (Mataram) 王家 (ジャワ島の同名の王家とは関係はない) となり、バリ人によるササク族の支配が続いた。

1891年、ササク族はバリ人支配に反乱した。ロンボック海峡に関心を持っていたオランダは、1894年、ササク族からの要請を受けてロンボック島に上陸し、マタラムは焼き払われ壮絶なププタン(→173)でもって王家は消滅した。

戦争でバリ建造物を徹底的に破壊されたが、かろうじて救い出されたのがチャクネガラ (Caktanegara) 王宮に付属する貴族の館の図書棚にあったナーガラ・クルターガマの古文書(→968)である。

その後、オランダがバリ島の占領に向かい、王国を一つ一つ潰していく際にオランダ軍にはササク族の兵が加わっていた。

今日のロンボック島の宗教分布はイスラム教94%、ヒンドゥー教4%、キリスト教1%である。今やバリ人の子孫は西海岸のマタラム周辺に見られるだけでイスラム教が圧倒的になった。宗教が異なる二つの文化は融和のかけらもなくある境界線でもって180度転換することは旅行者の目にも明らかである。大きくもない一つの島で二つの異質文化の相違がこのように極端に現われることが衝撃的である。

島の北部のバヤン (Bayan) 地方にはササク本来のアニミズム信仰にイスラム教が混合したワトゥ・テル (WetuTelu) という宗教が奉じられている。中国の穴明き古銭を用いた儀式などバリ島文化と共通するものがある。

ササク族の結婚は略奪婚である。男側が結婚したい相手の女性を略奪してくる。略奪後、男側と女側で使者がたち、女性側への補填や披露宴の日程が話し合われる。この場合、男側が下手で男性側の使者の村長は何時間も炎天下に待たされる。

略奪婚(→650)の形式はバリ島も同じである。女性のみであるが削歯(→649)の慣習もある。バリとササクは全く異なって見えるが、ヒンドゥー教やイスラム教が導入される以前の文化・慣習は基層のところで共通であったことを示す事例であろう。

ササク族は野性味豊かな民族性で知られている。ブルガ (beruga) はササク族独特の壁のない柱と屋根と高床だけの建物である。母屋のとなりに建てられた接客や儀礼・儀式的場であり、人々が

¹ ロンボック島のキリスト教徒とイスラム教徒の軋轢の観察については白石隆「インドネシアから考える」が興味深い。

集う憩いの場である。

祭りには儀式として棍棒と盾を持った男二人が叩き合うというかなり荒っぽい格闘技が行われる。米から作ったブルム(→837)という酒を飲む。しかし古いササクの伝統は正統派イスラム教の浸透に伴い次第に消えつつある。

214. スンバワ島

スンバワ(Sumbawa)島はロンボック島の東側の大きな^{はさみ}鋏の蟹のような奇怪な形をした島であり、西ササ・トゥンガラ州に属する。インドネシア東西5000kmの真中になる。よく見れば島の形も臍^{へそ}に見えなくもない。

一つの島であるが二つの島のごとく、東西に分かれて西にスンバワ族、東にビマ(Bima)族が割拠しており、スンバワ島のスンバワは本来は西部分だけの呼称である。スンバワ族は西隣のロンボック島のササク族と共通する所が多い。東のビマ語を話すビマ族でフロレス島の民族との関係が強い。インドネシアの農耕用の西の牛と東の馬の境界も島を縦断している。

1929年にビマ族のスルタンの娘とスンバワ族のスルタンの息子が結婚したのが両民族間の最初の結婚であったという。島の中に大きな壁があり、それまで両民族は結婚はもとより文化的接触もなかったのでオランダ語でしか会話できなかった。今日では両民族の共通語は国語のインドネシア語である。

ビマ族はマハーバーラタの神話に登場する英雄のビマ(→948)にちなむ。伝説によればビマは間違っ^{いみだ}て実の娘と関係する。生まれた子は筏^{いかだ}に乗せて流され、その赤ん坊が着いた島で成長して王朝を創設したことからビマ王朝という。ちなみにビマ族はヒンドゥー教のインドネシア列島浸透の東限の民族である。

その後、王国の内紛の際にイスラム教への改宗を条件にスラウェシ島のゴワ王国(→267)からの援軍をえて勝利した。それがスンバワ島へのイスラム教の導入の契機となり、1620年マ・バタワドゥ(MaBatawadu)王が最初のスルタン²になった。ビマ王国の最盛期にはフロレス島、ティモール島、スンバ島にまで覇権が及んだ。

ビマ・スンバワ両民族に共通することは熱心なイスラム教徒であることである。ヒンドゥー教のバリ島のさらに東側にオーソドックスなムスリムがいることは奇異でもある。

敬虔なイスラム教徒で知られるビマ族であるが、東の僻地ではドゥ・ドンゴ(DouDonggo)というイスラム教以前のアニミズムが生き残っている。マラフ(Marafu)という空、水、風を崇める自然崇拜と祖先崇拜のアニミズムであるが、イスラムに^{じゅんか}醇化されつつある。

言語、宗教、慣習など文化的にはスラウェシ島の影響が強いが、スンバワ島の名物としてあえて挙げるならば泥田で行われる水牛レース³と儀式として行われる“拳闘”である。スンバワ・ブサールに王国時代の木造の王宮が残っているが破損が著しいため、日本の文化庁が保存調査に乗り出した。

スンバワ島北岸の沖合いモヨ(Moyo)島にあるアマンワナ(Amanwana)ホテルはアマン社⁴が造

² スンバワ島では王国のあった王宮が観光地になっている。伝統様式の木造の王宮はダラム・ロカ(Dalam Loka)といわれる。

³ 田の中で行う水牛レースは“蹄耕(→060)”の名残であろう。

⁴ アマン・リゾートはアジア中心の高級リゾートで知られる。インドネシアにはバリ島に3箇所、スンバワ島と中部ジャワにある。少し交通が不便な所に所在するが、不便であることが最高の贅沢になるようになっている。世界の超富裕層が日常を脱するた

った世界的に有名な超高級のコテージ型のリゾート・ホテルである。海浜のリゾートのみならず森林のエコ・ツアーを楽しみに世界の王侯貴族のやって来る所である。生前に英国のダイアナ妃が子供を連れてやってきたことがある。

215. タンボラ山

スンバワ島サンガル (Sanggar) 半島の先端にある「タンボラ (Tambora) 山」の 1815 年の爆発は有史以来世界最大の火山爆発とされている。4 月 5 日から 7 月 15 日に及ぶ爆発によって島の東部に存在したタンボラ王国は溶岩流の下になり住民は全滅した。今日は火口から埋没した地下の村の鶏鳴が聞こえるといわれる。埋没地域の現在の住民はその後のバリ島、ロンボック島からの移住者が多い。

タンボラ山の裾野は 40-50km で富士山よりやや大きい。もともと 4200 ㍎の高さであったものが、山の 1200 ㍎が吹っ飛んだと推定されている。現在の高さは 2936 ㍎の円錐台形で、火口縁から直径 6 km の火口が 700 ㍎下に見える。爆発時の火山物質噴出量は 150km³ といわれる⁵。数字ではその多さは実感できないが、1980 年の北米のヘレン火山の噴出量の 80 倍になる。とにかく島は降灰のため 3 日間は日中も暗かった。島は降灰で砂漠さながらの風景になり、房総半島とほぼ同程度の大きさのサンガル半島から生物は全て途絶えた。

成層圏にまで達した微粒灰の影響で地表に達する日光量は減少し、1816 年の北半球全体を覆った異常寒冷気候の原因とされている。北アメリカやヨーロッパでは冷夏のため作物の不作から飢饉^{ききん}となった。その後、インドから世界に流行したコレラも飢饉が引金であったことからこれもタンボラ山の所為にされている。しかし日本 (西暦 1816 年=文化 13 年) や中国では気候の異常はなく穀物は平年作であったことの理由が解明されていない。

火山の爆発による直接の死者は 1 万人以上であるが、島は 1 ㍎の火山灰に覆われ農作物の収穫はなく飢饉によりスンバワ島の人口の 2/3 が死亡、死者の総数は隣のロンボック島も合わせて 7~8 万人といわれる。飼料不足で馬や牛の家畜も犠牲になった。

バリ島やジャワ島にも降灰で日光が遮られ気温の低下による穀物の不作となった。中には降灰が雨で流される程度の所では灰が虫害を防ぎ、肥料になり豊作になったという記録もある。

タンボラ山の爆発の当時、英国のラッフルズ(→276)がジャワ島の副総督であった。タンボラ山の爆発音はスマトラ島まで砲声のように聞こえ、降灰は 1000km 離れた西ジャワにまで及んだ。ラッフルズは各地の駐在官からの報告を求めた。東インド各地からの詳細な報告は以降の火山研究の先駆けとなるものであった。

ラッフルズはジャワ島の被害はたいしたことがないことを確認したが、現地の飢饉の救援のため食料を乗せた船を派遣した。ジャワ島が元のオランダへ返還される過渡期であったためタンボラ山の調査記録は 1815 年 9 月 28 日で終わり、ラッフルズはジャワ島を退去した。タンボラ山は以来、

めに利用するところである。中部ジャワのアマンジオはボロブドゥール遺跡を望む地にある。

⁵ 関西国際空港の埋立土砂量が 1 期 (1.8 億 m³) 2 期 (2.5 億 m³) 併せて 4 億 m³ (0.4km³) から、噴出量の大きさが分る。タンボラ山の噴出量について、「クラカトアの大噴火」では 46 km³、クラカタウは 25 km³ としている。マグマ換算にすると量は圧縮されるらしい。

⇒町田洋『歴史を変えた火山の大噴火』、NHK 日本人プロジェクト編「日本人はるかな旅②」

平穏を保っているが、最近では 1985 年にスンバワ島の東にあるサンゲアン (Sangeang) 島の火山爆発で 3 千名が避難した。危険のため島への帰還が禁止され、元島民は島の対岸のスンバワ島に居住している。

⇒021.火山大爆発

216. コモド蜥蜴島

小スンダ列島が東へバリ島⇒ロンボック島⇒スンバワ島と連なる次の東側の島は「コモド (Komodo) 島」という 390km²の小さな島である。島の形は複雑で半島や岬が多く、山地が島を覆っているが、平地は少ない上、乾燥気候のため人の居住を妨げている。

小さな村があり数百人の住民がいるが、それより多くの蜥蜴が徘徊していることで有名な島である。島の名にちなみ“コモド蜥蜴”といわれ、コモド島とその近隣のリンカ (Rinca) 島にのみ生息している。

コモド・ドラゴン (恐竜) という呼び名もあるが、長さは 3 米、体重は 130 kg もあるという世界でも最大種の蜥蜴でありドラゴンではない。アジア大陸とオーストラリア大陸の間の生物界の狭間でどちらの大陸にもその関係を探し求めることができないという生物界の謎の動物である。島の周りの激しい潮流が生物の孤立化をもたらしたのらしい。

人間の進出に伴い鶏などを襲うようになってきた。人も襲われることがあるらしい。地元の住民は土地の神と崇めているが、人間との共生は難しく激減が危惧されて、現在は特別保護動物になっている。

コモド蜥蜴を見る観光ツアーがある。島には餌場があり、観光客が訪れると二つに割れた舌をチラチラさせ、蜥蜴が集まってくる。木から吊るされている山羊に蜥蜴が飛びつき頑丈な爪で引き裂き、骨ごとガリガリと食べる迫力あるシーンが見られる。

ガイドブックもパンフも英文ばかりであるのは観光客のほとんどは欧米人だからである。欧米人が観光と称して不便な所へ手間をかけてやって来てこのようなものを見たがるのは彼らは本質的に肉食民族であり、見事な食いっぷりに自己陶醉に陥るからであろう。

蜥蜴は餌を求めるためには鹿や豚を走って追いかけ、木登りもする。一度に体重が 2 倍になるほど食べると 40 日ほど食べなくてもよい。しかし最近のコモド蜥蜴は餌つけで十分食べるため精悍さが失われ怠け者になったそうである。島の矛盾は蜥蜴は餌で腹いっぱい食べて腹が膨らんでいる、一方、島の子供は栄養失調で腹が膨らんでいる。

コモド島観光はフロレス島の西端にあるラブハンバジョー (Labuhanbajo) から船便を利用する。ラブハンバジョー空港はコモド島への玄関になることからコモド空港ともいわれる。

ところが最近、世界遺産にコモド島が登録されてからコモド蜥蜴のみならず島の住民にとっては大変なことになった。政府による本格的保護が行われるようになったからである。本格的保護とは“野生”に戻すということで、それまで観光客へのショーとして行われていた餌つけは禁止された。

この結果、迫力あるショーがなくなり観光客が激減し、餌つけや土産物売りの島民は生計に困るようになった。一方、コモド蜥蜴は餌を求めて集落の近辺をうろつき家畜や人までが襲われるようになった。観光収入と餌つけに慣れていた島民と蜥蜴は新事態に適応しかねているらしい。

217. フロレス島

フロレス島はヌサ・トゥンガラ諸島の中ではティモール島につぐ大きさで大阪府、京都府、兵庫県を併せた面積に相当する。その特徴は東西に 700km と細長いことである。“花の岬”という意味の「フロレス (Flores) 島」の優雅な名の語源はポルトガルの航海者ガボットの命名に由来する。しかし実際はサバンナ気候の島であるから年中、特に花が多いというわけでもない。船乗りにはむしろ“石の島”として知られていた。

島を東西に結ぶ道路が出来たのも比較的最近のことでその幹線をバス旅行した旅行記によると大変な旅である。

サバンナ気候のため雨量が少なく、人は山岳部の谷合で農業を営んだが農産物は乏しかった。居住地が内陸部であるのは海賊が横行する海岸を避けたためである。

イスラム教はイスラム教徒を奴隷にすることは禁じているが、非イスラムの住民を奴隷にすることは勝手である。従ってフロレス島から東の非イスラム地域は奴隷の供給源となり、19世紀以前のフロレス島の産物は奴隷と白檀(→057)であった。

島の西部のルトン (Retung) に存在したマンガライ (Manggarai) 王国⁶があり、スンバワ島のピマ王国の支配下にあったが、代わって勢力を伸ばしてきたバリ島からの攻略をオランダの支援で跳ね除けた。以来親オランダからキリスト教に改宗した。

島には幾多の民族が居住し部族の首長はいたが、島の部族を統一した王権は存在しなかった。このためテルナテ王国(→269)やゴワ王国(→267)など島外の外部勢力による支配に甘んじた。

細長い島に活火山が 14 もあるという賑やかさであるから災害もある。1992年12月にフロレス島の東部のマウメレ (Maumere) の沖の海上でマグニチュード 7.5 の地震が発生した。ヤシの樹よりも高い津波が押し寄せ、2000人以上の死者を出した。

火山は一方では美しい自然をももたらす。この中ではクリ・ムトゥ (Keli Mutu) 山が特に知られる。早朝登山を行い冷気の中で日の出を待つ。太陽光線の中で草木のない荒涼たる山肌の下に3つのカルデラ湖が見える。含有鉱物で色が隣り合う湖の色が異なり、エメラルドがかかった赤色と白濁色と青色の三色の輝きは神秘的らしい。5000ルピア紙幣のデザインにも使用されている。

住民の言い伝えによればクリ・ムトゥ山にはコンデラツ (Konderatu) という守り神がいる。50年前までは火口にお供えをする儀式があったが、最近では村人は登山者がいる間は雲が切れて火口の全容を見せることをコンデラツ神に祈願する。

フロレス島はイカット(→928)の産地である。農閑期に女性が屋外でイカットを織る光景が見られる。有名な産地は数箇所あるが、交通の便のよいンゲラ (Nggela) 村、シッカ (Sikka) 村ではイカット収集を兼ねた観光客が多い。

⇒621.フロレス島の民族

⁶ ジャカルタのコタにマンガライという地名がる。その由来はオランダ時代、ここはヌサテンガラから集められて奴隷の市場があったことになむらしい。

218. カトリックの島

フロレス島の中央にあるエンデ (Ende) はイピ (Ipi) 火山に抱かれた湾の奥にある。小さな湾と山麓に広がる町並みがあり、その中心部にカトリックの大聖堂がそびえたつ。地中海を思わせるような風景である。エンデでは教会のみならず病院、学校の公共施設もカトリックのものである。東インドの最大の出版社はエンデにあるといわれたのはカトリックの印刷所がエンデにあったためである。

若き日のスカルノ大統領は政治活動で捕えられてエンデに流刑になった。当時のエンデはジャワ人にとって異境の地であり、雄弁のスカルノも言葉が通じないでは影響力の行使のしようがなかった。文化、宗教、言語の異なる所では格子なき牢獄であった。

指導者を連れ去られたジャワの民族主義者達はエンデに思いをはせた。エンデからはスカルノの内面的な宗教心の発露の手紙が出された。イスラム教改革派の論者ナシールとの国体論争(→417)はこの頃の“エンデ書簡”のことである。

スカルノはエンデでマラリアにかかった。植民地政庁はスカルノの健康を案じる民族主義者の非難を気にしてスマトラ島のブンクル(→099)に移した。客観的に見てエンデと比べてブンクルが衛生的とは思えない。しかし少なくともブンクルはスマトラ島であった。当時の民族主義者の視野におけるエンデの位置づけが分かる。

何れにせよエンデはカトリックの町であることが他のインドネシアの町とは異なる雰囲気をもたらしている。ただし公務員などジャワ島などからの移住者の多くなるにつれイスラムの色彩が次第に強くなっている。

1992年の地震による津波に襲われたマウメレの惨状を報じるTVを見て気がついたのはモスクと多くのイスラム教徒である。カトリックの島は次第に都市からイスラム化していた。マウメレは島の北側に面しているためエンデに代わり海上交通の拠点であり島の経済の中心になっていることからイスラム化が著しいようだ。

フロレス島の東端のララントウカ (Larantuka) はティモール島と香料諸島への航路の要衝になるので対岸のソロール (Solor) 島と併せ、19世紀の中頃までポルトガル(→270)の拠点であった。オランダの進出でマラッカが落ち、多くのポルトガル人は東に航海し逃れて着いたのがララントウカであり、さらにララントウカがオランダに帰属⁷してからポルトガル人は東ティモールに去った。

ララントウカにはポルトガル文化の香りが残っている。17世紀からポルトガルからのカトリック司祭しさいの派遣が途絶えたため、ララントウカのカトリックは独自の変化をとげ、祭礼など異色のものとなった。19世紀になって着たポルトガルの司教は現地で唱えられている呪文が分らなかったそうである。

フロレス島ではポルトガル系のトパセ (Topasses) ⁸といわれる子孫がいる。ポルトガル系といってもアフリカやインドからの連れてきた者やインドネシア人との混血のため風貌からの見分けは難しい。⇒716.カトリック

⁷ 1859年リスボン条約でオランダはポルトガルからフロレス島東部、ソロール島、アドナラ島を買収した。

⁸ トパセは「帽子の人」という意味である。ポルトガル人に連れられてインドネシアへきた黒人などはキリスト教徒の特権として帽子を着用したことからの命名である。

219. レンバタ島の捕鯨村

インドネシアに捕鯨村がある。場所は東ヌサ・トゥンガラ州のフロレス島とティモール島の間の「レンバタ (Lembata) 島」のバンダ海に面したラマレラ (Lamalera) 村である。狭い平地にしがみつぐ様に人口 2000 人弱の村がある。

農業だけでは生計を維持しがたく海に向かわざるをえなかった。幸いにして山が海にせまり水深があるため、村の前が鯨の回遊コースになっていた。

約 15 人を乗せた木造船で鯨を探しに毎日出帆する。村の慣習で女性を乗せないのは危険が高すぎるからであろう。幸運であれば潮をふく抹香鯨^{まっこうくじら}を発見する。悠々と泳ぐ鯨に全力をあげてヤシの葉の帆を満帆にして接近する。乗組員の中ではラマファ (lamafu) といわれる^{もり}鉾打ちが花形である。

鉾打ちは揺れる船の先端から鉾のついた約 5 m の竹の鉾柄を持ち、泳いでいる鯨に飛び掛かる。自分の体重をかけて^{こんしん}渾身の力でもって鯨の背^{せびれ}から体内に鉾を差し込む。鯨は驚いて潜水する。鉾には綱がついているので小さな船は鯨に引きずりまわされる。

哺乳類である鯨は息継ぎのため海上に浮き上がらざるをえない。そこへさらに新たな鉾を打ち込む。応援の船が駆けつけてさらに鉾がうちこまれる。

人と鯨の死闘は数時間も続く。さながら『老人と海』のスケールアップである。鯨が暴れると小さな船は一たまりもなく船はひっくり返される。尾鰭で叩かれると命を落とす。特に鉾打ちは最も危険である。浜には手足の欠けた元鉾打ちがいる。

苦闘の果てにようやく仕留めた鯨はお祭のような賑わいの浜に引き上げられ、直ちに解体され分け前が配分される。配分には厳格なルールがある。鯨の最初の鉾打ちは目の後ろの所の肉をとる。これを得ることが鉾打ちの名誉である。乗組員、応援者、船大工など関係者、未亡人も分け前にあずかる。

後に乾燥鯨肉は山の上に住む住民の長に送られる。海岸に住むことを容認してもらう条件としての先祖伝来の慣行である。捕鯨の村人はスラウェシ島からいくつかの島をへてラマレラ村に定着したと伝えている。

鯨油は燈火になる。肉は乾燥して乾し肉にして保存する。鯨は骨に至るまで余すところなくきれいになる。余分の肉はトウモロコシなどの農産物を得るために“物々交換”される。物々交換はレンバタ島以外のヌサ・トゥンガラ列島の僻地で行われているが、最近では貨幣経済が浸透しつつあり、物々交換が貨幣経済に移行する過程として“味の素”のパックが貨幣の役割⁹をしている。

1987 年 3 月以来、捕鯨は国際条約により禁止されている。禁止されているのは日本の漁業会社の捕鯨のような〈商業捕鯨〉である。これに対してラマレラ村の捕鯨は機械を使わない伝統捕鯨であり、エスキモーの捕鯨などと同様に〈生存捕鯨〉といわれ規制外にある。

年平均に 30 頭弱程度の捕獲であるが、年により増減は著しい。不漁の年はエイやその他の小物の捕獲で食いつなぐ。

⁹ ⇒瀬川正仁「ヌサトゥンガラ島々紀行」

220. スンバ島

鎖のように連なる小スンダ列島のうちフロレス島の南の外れた所に位置するのが「スンバ (Sumba) 島」である。オーストラリア大陸に近い分だけ乾燥の度合いが厳しく島の印象は赤茶色である。島の大きさは四国の半分、人口は 42 万人で乾燥度の比較的穏やかな西側に偏っている。

スンバ島が近代文明からも取り残されたのは石灰岩台地のため緑は少ない貧しい土地であり、交易の魅力が乏しかったためであろう。その中では白檀、奴隷がスンバ島の過去の特産品であった。その後はスンバ馬(→063)で知られていたが、最近ではイカット(→928)が有名である。

スンバ島イカットのデザインの特徴は鬮^{とくろ}の行列である。先祖の霊を表わす聖なる布であるが、首狩りして首を木につるして並べる“首の木”のイメージである。

手作りのスンバ・イカットの素朴な味わいが外国の好事家の注目を引いており、週に数回の飛行機便でイカットの仕入れの客がやってくる。ワイガプ (Waigapu) 空港の客引きはすさまじい。日本人の団体が来ると全部売り切れてたちまち品不足になるという僥倖^{きようこう}もある。かつてイカット織りは女性の仕事であったが、作るはしから売れるので男もイカット作りの手伝いをしているということだ。

西スンバでは昔さながらの伝統儀式^{ぼくしゆ}を墨守しており、ワイカブバ (Waikabubak) がその中心である。特に葬式が盛大であり、総ての家畜を捧げるのが伝統である。これには政府も見兼ねて屠殺税を設け過度の葬式用家畜の屠殺を防止しようとしている。

葬式に続いて巨石墳墓(→700)が築かれ石に彫像が刻まれる。できるだけ大きな石をできるだけ遠くから運んでくるのが死者への敬意の表われである。数十トンの石を村民総出で切り出してくる。大きなものは 80 トンの石もあるという。飛鳥の“石舞台”がゴロゴロと転がっているという感じである。

とんがり帽子型の屋根の家はジャワのジョクロ屋根(→794)よりさらには尖っている。高い屋根は高くすること自体に意義があり、実用からは程遠い。この屋根の並ぶ遠景はお伽^{とぎ}の国のようにさえ見える。パソラという騎馬戦の儀式も興味はつきない。

桃源郷のような島にも貨幣経済、学校教育とともにイカットを求める客、あるいはパソラを見る観光客が訪れ近代文明がもたらされる。今日ではスンバ固有の文化は西スンバの山奥の僻地でしか見られなくなった。

宗教は表面的にはキリスト教であるが、実質はマラプ (Marapu) 教と言われる在来の祖霊崇拜のアニミズムである。精霊信仰、首長・平民・奴隷の社会構造、イトコ結婚など〈民族学〉からも〈民俗学〉からも興味深い島である。

ある村の儀式には古い太鼓が保存されている。その太鼓の由来は親のいう結婚に逆らった娘が殺されて太鼓の皮にされたという伝説である。

⇒923.スンバ島の騎馬戦

221. ティモール島

ヌサ・トゥンガラ諸島で最大の「ティモール (Timor) 島」は九州並の大きさの島で人口は約 200 万人である。この大きさの島の割に民族構成は多様で 7 の言語 (数え方で 14 になる) があり、西か

らクパン族、ロティ族、ヘロン族、アトニ族、ベル族、ケマック族、マラエ族である。

マレー系民族とパプア系民族が混在しているが、ティモール島内に国境が生じたのは民族構成よりはヨーロッパ諸国による植民地化以降の歴史的経緯である。

民族分布が多様で小王国が分立しており、統一政権¹⁰はなかったところへポルトガル(→270)が到来したのは16世紀である。もっともそれ以前から中国人、アラビア人の商人に白檀(→057)の特産地として知られていた。

ティモール島は複雑な歴史を変遷してきた。1701年からポルトガルの統治をうけていたが、後からオランダがティモール島に割りこんできた。島の西と中央の豊かな地域をオランダが押さえ、ポルトガルは貧しい東に追いやられた。

1859年の条約により両国はティモール島を東西に分割し境界を定めた。今日の東ティモール国(→431)とインドネシアの国境である。植民地宗主国の都合で住民の意向とは関係ない。

ティモール島の西半分はオランダの植民地になり、インドネシア独立後は東ヌサ・トゥンガラ州(フロレス島を含む)となりクパン(Kupang)はその州都である。

インドネシア領域内にオエクシ(Oecussi)という東ティモール国の飛び地¹¹がある。オエクシの海岸に【1515年8月18日ポルトガルがここに上陸した】と記した碑がある。境界をめぐる交渉の経緯で、ポルトガルはかつての島全体を支配した政庁の所在地に固執したため、オタング領内の中に飛び地としてオエクシが取り残された。

ティモール島共通の特産物といえば白檀であったが、それも採りつくした後はせいぜいコーヒーが特産品という貧しい地域である。したがって日本の商社も用がない所であり、日本人で訪れる人は民族学研究者かイカット収集家であった。

独立問題で戦争の長かった東ティモールは殺伐としているが、治安の比較的安定している西ティモールでは乾燥した気候、オーストラリアに近い立地条件からリゾート地として開発が進められている。東インドネシアでリゾート開発というのは他に何も経済的に価値のあるものがない、という意味と同義語である。

ティモール島はティモール海を隔ててオーストラリアに向かい合っている。オーストラリアまで約700kmの距離である。ジャカルタまでの距離の1/3である。太平洋戦争開始時はオーストラリア軍がオランダに代わってティモール島を守った。

日本はティモール島占領後、オーストラリアの反撃に備えて島の守備を強化した。オーストラリア軍の空襲で、多くの住民は戦争の巻き添えをくった。その後、いわゆる東ティモール問題(→427)によって彼ら自身の戦いで犠牲者を重ねたことは痛ましい。

⇒694.東ティモール難民

222. 旧東ティモール州

ティモール(Timor)島の語源はインドネシア語で“東”の意味である。この地名はジャカルタの

¹⁰ 島中央部に存在したウェヘレ王国が有力であつたらしい。

¹¹ 東ティモールの西ティモール内の飛び地オエクシについての歴史経緯についての記述がある。⇒世界飛び地領土研究会HP

方角から見た命名である。東ティモールをインドネシア語で言うと「Timor Timur ティモール・ティムール」である。昔からそこに住む住民には自らの別の名があり、マウベレ (Maubere) と称する。しかし東ティモールの名が有名すぎるためマウベレの名はほとんど知られていない。あるいはティモール・ロロサエという言い方もある。ロロサエは「太陽が昇る」という意味のテトン語である。

九州程度の大きさのティモール島は東西に長く、乾燥気候のため全島を通して自然環境は厳しい。他のヌサ・トゥンガラ諸島の島と同じく一つの島に複数の民族がだんだら模様を描いて割拠していた。

東ティモールの住民の部族は異なるが、多数は共通語のテトン (Teton) 語を話した。ヨーロッパ人が来るまではティモール島の東も西もそれほど差はなかったが、島の東西を分ける決定的要因はポルトガル(→270)の縄張りへオランダが割り込んで島を東西に二分したことであった。

国力の低下していた植民地老大国のポルトガルがオランダ領東インドの中に飛び地の東ティモールに領土を維持しえたのは後見人である英国の威光である。当時のポルトガルは英国の保護国化していた。

オランダにとって自分の縄張りの中に他国の植民地が存在することは不愉快であったと思うが、植民地宗主国間の協調を壊してまで手に入れるほど魅力もない所であったというのが東ティモールがポルトガルの植民地として存続できた理由であろう。仮に全島がオランダに帰属しておれば20世紀末の東ティモール問題は存在しなかった。

ポルトガルにとって地球の裏側の植民地は政治犯の流刑地とカトリックの修道院ぐらいの用途しかない島であった。あえていうならば白檀とコーヒーが特産品であった。東ティモールへ着任した総督が発した第一声が「ここは地獄の入口だ」という科白^{せりふ}であったというエピソードがある。

東ティモールでポルトガルを偲ばせるものはカトリック教会以外にあえて探せばモザンビックやアンゴラ風のアフリカ風の民家があったりする、ゴアからきたインド人がいる、マカオからの中国人が定着している、というところが旧ポルトガル植民地らしい。

東ティモールが1976年にインドネシアに併合された経緯、併合後の独立を求める抵抗の中で多くの犠牲を払ったこと、インドネシアへの外交圧力の中でハビビ政権による独立容認の経緯は、[D-6章分裂の危機]にまとめた。

1999年世界の新聞の第一面は何度も東ティモール州の州都であるディリ発の記事や写真で埋めつくされ、TVでも放送された。写真やTVの映像で見るディリの町の光景はインドネシアの他の東方の島と同じであり、人々の容貌もそうであった。

⇒427.東ティモール問題の原点

223. イカットの島々

フロレス島の東にソロル(Solor)島、アドナラ(Adonara)島、レンバタ島(→219)、パンタル(Pantar)島、アロル(Alor)島が連なる。スンバ島とティモール島の間にロティ(Roti)島、サブ(SavuorSawu)島等がある。これらの島の一つ一つは沖縄本島以下の大きさにすぎない。

サバンナ気候の乾いた島々には岩石が剥き出しの大地や草原が多い。木は生えているが灌木の類で緑が薄い。島の風景は海辺と険しい山塊に貧しい村が散在する。

島と島の間では言葉が異なる。同じ島の中でも別の部族が海と山に分かれて暮らしていることが

ある。海側はイスラム教徒、山側はキリスト教という棲み分けがある。日本神話の“海彦と山彦”の世界である。

両者の間には言葉が通じないが、多くの島では物々交換が行われる。一般に交易は多くの言葉が飛び交う喧騒の場である。しかし交易が静かに儀式のように行われ、沈黙交易という。

共通して言えるのは乾燥地帯であるので農業用水はもとより生活用水の確保さえたいへんである。山と海では山の方が先住者の領域である。海側にスラウェシ島などからの移住者が居住している。先住者を水の不便な山へ追い払ったということではないらしい。海側の方がマラリア蚊も多く、津波の危険がある。特に奴隷確保のための海賊船が横行していた時代は海岸での居住は避けられた。

輸出品目もない貧しい村々は開発からとり残される。インドネシアの中で一人当たりの所得が最も低い地域である。雨が少なく乾燥が厳しいため、穀物の生産も十分でなくロンタル椰子(→045)の砂糖水で食いつなぐ。ロンタル椰子への依存が大きく“ロンタル椰子経済”といわれる。

ヌサ・トゥンガラ列島の多くの島はイカットで知られる。スンバ島やフロレス島のイカットは有名になりすぎて観光地化している。レンバタ島、アロル島、その他にサブ島、ロティ島は地図で探しても見つけにくい島であるが、これらの島名はイカット愛好者にはよく知られた名である。

島独特の特徴のある伝統のデザインのイカットが素朴な織機で織られていた。雨が降ると農業で忙しいので農閑期にはイカット織りに励んだ。手紡ぎで植物染料が使用されデザイナーが農婦であるイカットには伝統の本物の味わいがある。

ティモール島の東にあるレティ、モア、ラコールなどの小諸島の聖婚神話には豊穡儀礼が伴っている。毎年、雨季モンスーンの開始にあたって、天神ウプレロは祭儀中に一本の聖樹をつたって降臨し、大地の女神ウプヌサと結婚してはらませる。この際、住民の性的乱交が行われる、と真面目な本¹²に書いてある。

東インドネシアで行われているサシ(→623)という収穫を限定する社会慣行の起源は神話に由来する豊穡儀礼にあるのでなかろうか。⇒928-9.イカット

¹² 鍵谷明子著『インドネシアの魔女』